3 4 5 0 1

令和7年3月25日

札幌市立信濃中学校

令和６年度　自己評価及び学校関係者評価書

1　本年度の重点目標（目指す学校像）

生徒一人ひとりの生きる力を具現化する学校

生きる力～自分らしく生きる力、実生活で活きてはたらく力、共に生きる力

・誰にでも居場所がある　～多様性が支持される、傾聴してくれる人がいる

・「～したい」を実現する活動がある　～大切にしたい合唱の取組、「育てる」から「育つ」へ

・温かいあいさつが響く　～相互承認を高める第一歩として

評価方法

各質問項目において、Ａそう思う、Ｂだいたいそう思う、Ｃあまり思わない、Ｄそう思わないなどの４段階で評価をするアンケートを実施。Ａを４点、Ｂを３点、Ｃを２点、Ｄを１点として、平均値を算出する。平均3.0以上を評価Ａ、平均2.0～2.9を評価Ｂ、平均1.9以下を評価Ｃとしている。

2　学校運営の重点

◎「学ぶ力～自ら課題を見付け、自ら学び、自ら課題を解決する資質・能力」の育成を目指した「課題探究的な学習」と「自治的な活動」の充実

～未来において活きて働く学びとなるような「本物の経験」を創出する

◎ 解決しなければならない本校の課題：不登校対策の創造

～「通いたくなる学校・居場所のある学校・つながりのある学校」を具現化する

①生徒がやりがいを感じる授業、特別活動・学校行事、総合的な学習の時間を工夫する

②「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深いまなび」を実現する

③ 全教職員とスタッフがチームで生徒一人一人の自立を支援する

④ 子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援・教育を推進する

⑤ 家庭や地域とともにある学校づくりを推進するとともに、教育活動を積極的に発信する

⑥ 学校職員のウェルビーイングを目指し、誰もが働きやすい職場をつくる

3　自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価			学校関係者評価		生徒による評価			保護者による評価	
		中間評価	期末評価	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ	質問項目	中間評価	期末評価	質問項目	期末評価
重点目標・方針	学校課題・目指す学校像・運営の重点が共有され、学校・学年・学級経営、各校務において取組の改善が図られている。	A (3.3)	B (2.7)	改善の方向性のみを決めて、それについて足並みを揃えて取り組むために共通理解を図る時間を確保できていなかった。今後は、改善の方向性を共通理解する場をその都度丁寧に設定していく。	A	A					
学校関係者評価委員による意見	現在の学校の状況について適切に評価されており、改善策についても妥当である。職員一人ひとりが主体的に改善に取り組める仕組みづくりを丁寧に工夫していくと良い。										
重点①	生徒が「～したい」という意欲をもち、主体的に参画できる行事や委員会活動の創出ができている。	A (3.0)	A (3.0)	生徒の声を聴き、生徒が主体的に取り組める活動を考え、教師は先導・伴奏・見守りなど生徒の活動段階に応じて、関わり方を変えていくことを意識する。また、失敗を恐れず挑戦することに生徒は消極的な様子がある。相手の失敗を受け入れ、ともに改善に取り組む生徒同士の関係性を育むとともに、失敗が次につなげていく姿勢を教師も大切にする。	B	A	自分たちの『～したい』が実現できるように、自分たちの意思が尊重されている。	A (3.0)	A (3.1)	子どもが、学校生活をはじめとした様々な活動において、何を願い、どんなことを『したい』と感じているのかを話をすることがある。	B (2.9)
	学習や日常の活動において失敗から学ぶ場や相互理解を生み出す対話の場などを創出し、未来に活きて働く学びのきっかけとなるような「本物の経験」を生み出すことができている。	B (2.9)	B (2.7)				自分たちの問題を自分たちで解決できるように、お互いに協力したり、周囲から必要な支援を受けたりすることができている。	A (3.2)	A (3.3)		
							自分たちの行動や、それによって起きた結果に対して、責任があることを自覚している。	A (3.5)	A (3.5)		
							学校や家庭、地域の中で、「自分もその一員である」ことを実感し、お互いに大切にすることができている。	A (3.2)	A (3.3)		
学校関係者評価委員による意見	失敗を受け入れる寛容さを育むとともに、授業をはじめ様々な場面で失敗がより深い学び、より良い経験につながるように教師側も失敗を生かしていく姿勢を大切にしていくと良い。また、共通指標や全国学力・学習状況調査様々な調査の質問調査などから読み取れる生徒の特徴などについては、家庭での子どもとの関わりに生かせるよう情報共有に努めると良い。										
重点②	生徒の実態に即した指導計画・評価計画を作成し、生徒に見通しをもてるような授業を行っている。	A (3.1)	B (2.9)	生徒が自身の学習状況を把握しやすい評価・評定の実施に向けて、今年度は指導と評価の一体化に向けた研修を行った。生徒や保護者にとって、わかりやすく使いやすい学習評価となるように、学習状況の把握が容易になる手立てを講じていく。それと同時に、子どもの学習状況の把握について、説明会だけでなく、保護者への日常的な情報発信にも取り組んでいく。	B	A	各教科の学習では、課題や目的を見出して取り組むことができている。	A (3.1)	A (3.1)	学校の授業では、子どもがどんな学習をし、どのように取り組んでいるのかを話をする機会があり、学習状況を把握することができている。	B (2.6)
	生徒自身が自己選択・自己決定したり、他と対話することで思考を再構築したりする活動を通して、学びを深めていけるような授業が進められている。	A (3.1)	A (3.0)				各教科の学習では、自分で考えたり、調べたりする活動が行われている。	A (3.2)	A (3.3)		
							各教科の学習では、まわりの人と協力して結論を出したり、お互いの考えを交流したりする活動が行われている。	A (3.3)	A (3.4)		
	生徒の授業評価や評価・評定の結果等から、生徒の学習改善や教員の授業改善が進められている。	A (3.1)	B (2.9)				各教科の学習では、自分の学習状況を確認し、次の学習につなげるための振り返りの場面がある。	A (3.1)	A (3.2)		
学校関係者評価委員による意見	定期テストの廃止の経緯などの子どもの学びに関する共通理解が不十分であり、学校と保護者が同一歩調で子どもの育む機会を丁寧にもつことが大切である。学校からの情報発信だけでなく、学年ＰＴＡや懇談など保護者の声を聴く機会も充実させていくと良い。										

3　自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価			学校関係者評価		生徒による評価			保護者による評価	
		中間評価	期末評価	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ	質問項目	中間評価	期末評価	質問項目	期末評価
重点③	いじめの未然防止、早期発見に向け、日常の観察や気づきメモ等を利用して、きめ細かく生徒の様子を把握し、教職員で情報共有できている。	A (3.7)	A (3.3)	学校の相談体制については、保護者評価も高く、取組の方向性は良いと考える。今後も、現在の取組を継続し、丁寧な情報共有に努めていく。	A	A				家庭での子どものようすや、学校での出来事で気になることがあったときには、学級担任や学年所属の教員、スクールカウンセラーなどと連絡を取り、必要な相談ができる体制がある。	A (3.0)
学校関係者評価委員による意見	子ども同士の支え合い、助け合いの関係性が育っているかをどのように見取るのかを検討していくとともに、保護者と学校で同じ方向を向いて子どもを支えていけるように、連携を密に行っていくとよい。										
重点④	個々の生徒の実態を捉え、担任・学年が主体となって、SCや学びの教室等と連携しながらチームで生徒支援ができている。	A (3.5)	A (3.3)	保護者評価からは、生徒や家庭が何に困り感があるのかを丁寧に聞き取りを続けていく必要性が感じられる。校内の支援体制について、必要な支援を実現していくためにはどうすれば良いか、保護者とともに十分に協議を重ねて考えていく。	B	A				子どもが学校生活や学習に対して、何を課題と感じているか学校と家庭で共有し、学校・生徒・保護者の三者で実現可能な具体的支援について話し合いながら進めることができている。	B (2.8)
	子ども一人ひとりの教育的ニーズの把握、共有が図られ、それぞれに合った学びの保障に向けた取組を進めることができている。	A (3.1)	A (3.1)								
学校関係者評価委員による意見	個別の生徒支援については、学校と家庭で連携し、それぞれの役割を果たしながら協働的に子どもを支えることが重要である。子どもにとって必要な支援を実現させていくために、学校と家庭での話し合いを丁寧に進めていくと良い。保護者や子どもが相談できる窓口は、複数ある方が相談しやすさの向上につながると考えられる。										
重点⑤	小中一貫した教育をパートナー校と協力して進め、CSを導入し、子どもたちの成長を継続的に支えていく準備が進められている。	A (3.1)	B (2.5)	小中一貫した教育は、組織体制を各校の校務と関連付ける形で位置づけ、各校担当者間で各取組について直接協議しながら進めていく体制に変更していく。学校運営に関する情報提供は十分とは言えないため、教育課程説明会など説明の機会をつくり情報発信に努めるとともに、直接的な対話の機会をつくるなど受信の工夫をしていく。	A	A				学校ホームページや学校だより、すぐーるによる配信などから、学校の取組について、情報を得ることができている。	A (3.3)
	学校運営や各取組のねらい、目指すものを家庭や地域に発信し、理解や協力を得られている。	A (3.1)	B (2.9)								
学校関係者評価委員による意見	コミュニティスクール導入に向けて、情報発信だけでなく、地域や家庭の意見も聴く機会をつくるなど、互いに子どもより良い成長のために何ができるかを出し合える体制をつくっていくと良い。										
重点⑥	校内の雰囲気がよく、職場で良好な人間関係が築けている。	A (3.1)	B (2.8)	中間評価の時期と比べて、業務の進めにくさを感じている教職員が多くなった様子がうかがえる。会議間隔の長さから、自分の業務や学年、校務、学校全体の方向性について確認する機会が少なく、見通しがもちにくいことが理由として挙げられる。会議の回数をふやしたり、各教職員が年間の月別行事予定で自分の業務をチェックしたりするなど、業務の見通しもって取り組めるようにする。	A	A					
	職員全員がそれぞれの役割にモチベーションや意義をもち、目指す学校像の実現に向けて取り組むことができている。	A (3.0)	B (2.8)								
	業務に達成感や満足感を感じている。	A (3.3)	A (3.1)								
学校関係者評価委員による意見	打ち合わせ時間を長くとること以外にも短時間で業務の進捗状況を確認する場をもつなど、職員間でやりとりしながら主体的に業務を職員一人ひとりが進めていく工夫ができると良い。										